

サン・シモンの階級論

田中 秀隆

19世紀の初頭に活躍したサン・シモンは、今では半ば忘れられ、過去の人物となってしまったかのようなものである。彼の活動した時代は、社会学にその成立の条件を与えたフランス革命と産業革命という二つの革命の間であった。その社会学にとって無視することのできない時代に、彼は現実的な問題関心をもって著作活動を行なったのである。本稿は彼の社会学的構想力の一端を、階級論の分野を中心に、著作期を追って考察することで明らかにする。

1. 分析の視角と問題の所在

本稿は、サン・シモンの思想の現代的な側面を明らかにするために、彼の階級論を取り上げる。サン・シモンの階級論といっても、マルクスの階級論にサン・シモンの階級論がどう影響を与えたかを論ずるわけではない。サン・シモンを、ある思想の成立に寄与した先行要素として評価する立場を筆者はとらない⁽¹⁾。

本稿では、むしろ、次のように述べられることが、なぜ起こったのかを問題にする。

サン・シモンの理論の中の重大な脱落を大目に見ることができ、そして、マルクス主義が新しい状況に適應する能力を否定するならば、産業社会が、資本主義にせよ、共産主義にせよ、機能的に共通の基盤の上にたっていることが、ひとたび明らかにされるや、サン・シモンとかれの産業社会の機能的組織のモデルは、マルクス主義よりもっと堅固な概念把握と、もっと広い包括性を提供する。〔Ionescu, 1976: 4-5〕

思想家の評価は、評価時点での時代の思想と不可分のものであり、「研究史じたいが思想史である」(水田〔1971: 304〕)という側面を忘れてはいけない。なぜ、そういう評価が出てき

たのかを、その研究者のおかれていた状況によって説明することも可能であろう⁽²⁾。

本稿では、サン・シモンが現代的と評されるようになった点を、内在的に解明することを目的とする。ここで、サン・シモンの階級論を取り上げるのには、3つの理由がある。

まず、サン・シモンの思想的活動全般を通じて、常に階級論的主張としてとらえられるものがあるから⁽³⁾。次に、サン・シモンの階級論をどうとらえるかが、サン・シモンを社会主義者として見るか、産業主義者として見るかの解釈の分かれ目ともなっていること⁽⁴⁾。最後に、階級論の歴史を考える際に、サン・シモンが、時代的におもしろい位置にいたというからである。

階級論とは何か？ これ自体たいへんむずかしい問題である。まず、仮に、それを、社会的諸資源の分配の不平等をもとに社会の構成員を区別する試み、と考えよう。この種の不平等は、たしかに太古から存在した。それゆえ、階級論の歴史を、古くに溯ることもできよう(↳ Lenski〔1966: 3-7〕)。しかし、プラトンから啓蒙主義思想家にいたるまでの社会的ヒエラルヒーに関する研究は、「19世紀に革命的デモクラシーと産業主義の諸力が働きはじめて以後にみられる成層研究の強度とその包括性にはく

らぶべくもない」(Nisbet〔1966=1977:226-227〕)とされている。

19世紀の上四半期に著作活動を行なったサン・シモンは、フランス革命は体験したが、産業革命を体験したわけではなかった。彼は1830年まで生きてはいない。時代的に見ると、サン・シモンは階級論の過渡期に生きた人間ということができよう。以上のような理由から、サン・シモンを論ずるにあたって、まず彼の階級論を問題にする。

筆者は、サン・シモンの思想全体は、社会再組織論として理解することが可能であり、その展開に応じて、著作期を4期に区分できると考えている(→田中〔1983〕)。階級論の展開を検討するに際しても、その区分に従うことにする⁽⁵⁾。以下、本稿で引用・言及した著作を区分しておく⁽⁶⁾。()内は引用に際しての略号である。

第一期(1803-1813)

1803 『同時代人にあてたジュネーヴ人の手紙』(Lettre)

1807-8 『19世紀の科学的研究序説』(Introduction)

第二期(1814-1815)

1814 『ヨーロッパ社会の再組織』(R. S. E.)

1815 『反対党の結成に関するル・コント・ド・サン・シモンの手紙』(L. E. O.)

『国有地所有者協会の計画』(Projet)

『国有地の防衛者と題する著作の趣旨書』(Prospectus)

第三期(1816-1825)

1816-18 『産業』(Industrie)

1819 『政治』(Politique)

1819-20 『組織者』(Organisateur)

1821-22 『産業体制論』(Système)

1821 『労働者諸氏に』(Ouvrier)

『プロレテール階級』(Prolétaire)

1823-24 『産業者の教理問答』(Catéchisme) 第四期(1825)

1825 『新キリスト教』(Nouveau)⁽⁷⁾

2. サン・シモンにおける階級論的視座

サン・シモンは、著作活動の初めから、人類を3つの階級に分けるとらえ方を示している。ただし、3つの階級に分けたといってもそれが当時の身分制度をそのまま反映したものならば、ここで特に取り上げる必要はないだろう。

第一の階級は、あなたや私が名誉にも属している階級なのですが、この階級は、人間精神の進歩の旗の下に歩むもので、科学者や、芸術家や、自由主義的な思想を持つすべての人々から成っています。第二の階級の旗の上には、革新なし、と書いてあり、第一の階級に入らないすべての所有者が、この第二の階級に結びついています。

第三の階級は平等という言葉に加担するもので、人類の残りを含んでいます。〔Lettre, vol.1:26=1948:66〕⁽⁸⁾

このように、サン・シモンは独自の階級区分を行なっている。ただし、区分の仕方よりも、サン・シモンがその区分を用いてフランス革命を説明しようとした点に注目すべきである。すなわち、フランス革命は、第一の階級に属する人々が、第三の階級を駆り立てて行なったのだという⁽⁹⁾。資本家と労働者の対立ではないけれども、社会的闘争を階級に結びつけて理解しようという試みがある。人間を階級的存在としてとらえるこうした視点は、フランス革命をいかに説明するかという課題と結びついている。

サン・シモンにとってそのことは、フランス革命の混乱の後、社会の再組織の担い手を求め

るという課題の一部となっている。

そこで、サン・シモンの階級論の特徴は、①現在の階級状態を記述する、②社会再組織の担い手を求める、という2つの課題に同時に答えることを要請されている点にある、と言えよう。だがこのため、彼の階級論は、いちぢるしく理解が困難なものとなった。当時の社会層の実態的な記述と、来たるべき社会の担い手の役割についての理念的な記述とが、しばしば混在するからである。サン・シモンのたてている階級区分を、当時の社会層の実態と結びつけることは、彼の現状把握を知るためにも意味ある試みであろう。だが、彼の階級区分が、来るべき社会の担い手の像を投影したものであったことを見落してはならない。ことに、現代のわれわれにとっては、後者、すなわち、彼の構想力の描くところを知ることが、興味ぶかい。

そのためには、担い手論としての記述は、機能的観点からなされているということに注意しなければいけない。

先に見た第一期の階級区分は、知識人・所有者・非所有者の三分法としてまとめることができる。社会再組織の担い手は、知識人に求められるのであるが、これが、フランス革命の首謀者とされていた第一の階級と同じかという点、実はちがってきている。つまり、フランス革命の首謀者とされた、〈科学者、芸術家たち〉は、具体的には百科全書派らの啓蒙思想家を念頭において述べられている。一方、社会の再組織の担い手となる科学者たちには、人類の共通利害である諸科学を進歩させるという役割が与えられている。

諸科学の進歩が共通利害として考えられたのは、科学の進歩した国（イギリス）では、労働者たちも豊かな生活ができるようになっているという点の一つ〔Lettre, vol.1:34-35=1948

:73〕。そして、実証化した科学が人類に有用な知識を与えるようになってきたと科学の発展をとらえたことが理由である⁽¹⁰⁾。

共通利害である諸科学の進歩を計ることで、3つの階級の利害を調整しようとサン・シモンは考えている。社会再組織の担い手としての知識人は、諸科学を進歩させる役割を担っている。一方、〈科学者、芸術家〉とフランス革命当時呼ばれていた人々は、その役割をはたさないの、社会再組織の担い手としては考えられていない。彼らは、後に、〈形而上学者、法律家〉としてはっきり区別されるようになる。

このように、サン・シモンの用語法では、歴史の実体の性格と、担い手としての役割の期待にずれがある。我々は、どういう役割を担い手に期待したのかに注意をむけなければいけない。

第二期の『ヨーロッパ社会の再組織』（1814）の中では、階級間の利害の中に新たなフランス革命が再びおこりうる可能性を発見し、警告を発している。ここでは、ナポレオンがエルバ島に流され、ルイ18世が王としてむかえられ、ウィーン会議が行なわれていた時のフランスの現状が分析されている。階級は大きく三つに区分される。特権階級（貴族）・商業階級・非所有者階級と分けられ、さらに、特権階級は、軍人階級と司法官およびそれに属するすべてのものの階級とに二分されている。

また、特権階級内で、階級の区分とは独立に、新旧の貴族の対立がある。旧貴族は、要職を自己の世襲財産とみなしているの、新参者が祖先の地位につくのを憤慨している。新貴族は、富と能力と知力によって地位についたと誇り、出生のみにたよる旧貴族がその地位にふさわしくないと考える。

この対立は、第一の特権階級である軍人階級において、特に顕著である。ナポレオンに仕え

た将校たちは彼らと疲労も勝利もともにしたことのない者を指揮官とするのを不満に思っている。一方、旧貴族は亡命先からもどってきて総ての軍務とかつての特権を要求する。

第二の特権階級である司法官とそれに属する総てのものは、政治的重要性と名誉を失なって、面目をつぶしている。たとえかつての特権を回復することは無理でも、せめて、イギリスにおけるように議会にその地位を占めることを望んでいる。

商業階級に属する、銀行家、商業者、製造業者は、政府から独立した堅固な銀行の設立を欠き、産業の奨励を欠き、成功した人々に対する敬意さえも得てはいない。これらの階級は国の力にとっては非常に重要であるが、未だ貴族の主張と貴族への尊敬によって押しつぶされている。

そして、非所有者階級の間では、租税の再統一に反対する叫びがある。〔R. S. E. vol.1 225-7=1981:497-8〕

ただし、これは、階級区分としては、不十分なものである。というのもこの区分では、社会の構成員すべてを直和に分割することができない。サン・シモンとしては、顕著な不満のある階級を並べているわけである。しかし、区分は不十分なものでも、階級的な存在として成員をとらえているということはできるであろう。

この時期のサン・シモンは、ヨーロッパ社会全体を再組織することに焦点をおいている。ヨーロッパ全体会議を再組織されたヨーロッパ社会の姿として構想したサン・シモンは、そのための第一歩として、英仏共同議会の形成を提言している。〔R. S. E., vol.1:206-209=1981:488-489〕。

第二期の小品群に一貫する政策的主張は、英仏同盟であり、それは社会において政治制度を

ドミナントな決定因と考え、すぐれた政治制度とはイギリスの代議政体だという認識に支えられている⁽¹¹⁾。

そこで、サン・シモンが、具体的に呼びかけを行なっている対象は、〈国有地の所有者 (propriétaires de domaines nationaux)〉であるが⁽¹²⁾、彼らにどのような役割を求めていたのかに注意しなければいけない。

サン・シモンは、議会制にとっては、野党の存在が必要であると説く⁽¹³⁾。その彼が、反対党を形成する人々として目をつけたのが、〈国有地の所有者〉であった。そこには、革命期に処分された国有地が、王政復古により、旧所有者の手にもどるのではないかということから値が下がったり、投げ売られていたりしていたという事情が背景にある。サン・シモンは、そこで、その〈国有地の所有者〉に対して、反対党を形成することで、王に憲章をまもらせるようにさせて国有地の信用を回復させようと呼びかける。彼は、国有地の所有者たちが、反対党を作ることを目的とした協会の設立を提案している⁽¹⁴⁾。

〈国有地の所有者〉たちが、目をつけられたのは、そこに共通の利害があったからで、サン・シモンの主眼は反対党を形成することであった。さらにそのことは、議会制をよりイギリスに近いものにしようとする試みとして位置づけられている。したがって、社会再組織の担い手としては、議会制度を形成、運営する人々が考えられていたと言ってよいであろう。

3. 社会層区分の基本カテゴリー

第一期と第二期の階級区分を見てきた。こうした階級区分として明示されているものとは別個に、サン・シモンにとって社会層区分の基本的なカテゴリーとなるものは、〈働く者〉と

〈働かない者〉の区別である。

サン・シモンには、すべての人々が働く社会を望ましいと考える基本的な社会像がある⁽¹⁵⁾。『19世紀の科学的研究序説』においては、「人間は働かなければならない」という道徳律を出している。サン・シモンには勤労を尊重する考えが、第1期からあった。彼が労働といっても決して肉体労働のことだけを示しているのではない。

わたしは労働の観念をできるだけ自由に広げることが大事だと考える。公務員とか、学問や芸術、それに手工業や農業に従事する人間は、土地を耕す農夫や、荷物をかつぐ人夫と同じように、実証的なやり方で働いているのである。しかし、職業ももたず、土地を生産的につかうのに必要な仕事をみずからおし進めようとしないう、年金生活者や地主は、たとえ施しをしようとも、社会から扶養されている人間である。〔Introduction, T.6:177=1970:122〕ここでは、労働の観念が広げられ、働くものと働かざるものの区別が現われてきている。ただ、この段階では、これが階級区分と結びついてはいない。第三期になり、産業者があらわれることによって結びつくことになる。その間のサン・シモンの思想の展開は、〈実証的なやり方で働く〉ということに徐々に内実が与えられていく過程としてとらえることができる。しかし、その結びつきが可能になるためには、一方で、社会再組織の原理に関する認識上の転換を必要とした。

まず、その転換について簡単に述べておくことにしよう。

旧組織のいたるところで、議会制的な政府の形態を、位階的、あるいは、封建的な形態のかわりに樹立するならば、この単なる置き換えによって、前よりももっと完全で、もはや一時的ではない新しい組織を得ることができるだろう。というのも、この組

織の長所が、ときと共に変化する人間精神のある特定の状態から由来するのではなく、永久不変の事物の本性から由来するためである。〔R. S. E. vol.1:196-197=1981:482-483〕

だが、こういう政治制度を偏重した見方は、第3期の『産業』においては否定される。

確かに、議会制政府の形態は、他のものに比べてたいへん好ましい。しかし、それが唯一の形態なのではない。所有権の構成が基礎である。したがって、社会機構(édifice)の基盤に真に役立つのは、この構成である。

したがって、我々の意見では、解決すべきもっとも重要な問題は、いかなる所有の方法が、自由と富という二重の点から、社会全体のもっとも大きな幸福のために構成されるべきであるかを知ることである。〔Industrie, vol.3:83〕

統治形態よりも所有構成が、社会において重要であると考えようになっている。これは、セイらの影響である⁽¹⁶⁾。ただ、サン・シモンとセイは、富が本質的に政治組織から独立している点と同じでも、セイがそこから富それ自体の解明に向けたのに対して、サン・シモンは、富の発展により好都合な組織を求める視点を捨てない。⁽¹⁷⁾

〈経済学のみであらゆる政治学となるであろう〉〔Industrie, vol.2:185-186, N1〕と、経済学を政治学の原理として受け入れたサン・シモンにとって政治学は、生産の科学であった。

政治学とは生産の科学である。すなわち、あらゆる種類の生産にもっとも好ましい事物の秩序を目的とする科学である。〔Industrie, vol.2:188〕

政治学の目的が生産に還元されている。その生産とは、〈実証的なやり方で働く〉ことの一つの内実をなしている。サン・シモンは、実証的なやり方で働くこととは、産業に従事することだと考えた。そのことで、社会層区分の基本

的なアイデアと階級区分が結びつくことになる。

働く者、働かない者の対比は、「国民党もしくは産業党対反国民党」と題した『政治』の第十分冊でもっとも明らかになる。

国民党は以下のように構成される。

1° 社会への直接の有用性をもった労働を行なっている人。

2° 上記の労働を指導するか、あるいは資本を産業的諸企業に投下する人。

3° 生産者に有用な仕事によって生産に協力している人。

〔Politique, vol.3:195〕

第一項で労働者、第二項で経営者・資本家、第三項には学者・芸術家が該当する。

反国民党は以下のように構成される。

1° 消費するが何も生産しない人。

2° 自分の労働が社会に全く有用でなく、生産者の役に少しもたたない人。

3° 適用すると生産を妨げ、産業者から第一級の社会的重要性を奪う傾向のある政治的原理を公言する人。

〔Politique, vol.3:195-6〕

具体的には、貴族、司祭、寄生地主、裁判官、要するに〈経済と自由にもっとも適した体制の確立に対立する人々すべて〉〔Politique, vol.3:204〕である。これは、産業体制の確立についてサン・シモンの考えがかたまるにつれて、より明確になってくる。

ここでは、それを見る前に、産業者（国民党）の概念をはっきりさせておこう。『組織者』では、勤労階層は、学者、芸術家、アルティザンと呼ばれている。これは、産業活動を科学、芸術、工芸としてとらえているのに対応する（↳〔Organisateur, vol.4:191-193〕）。サン・シモンはアルティザンに以下のように、特別な意味をもたせて用いている。

一般にアルティザンというと単なる労働者のみを指す。遠回しな言い方をさけるために、われわれは、この言葉によって、物質的な生産（produits matériels）に従事するすべての人々を意味することにしたい。すなわち、耕作者、製造業者、商人、銀行家、および、彼らに使用されるすべての使用人あるいは労働者である。（Organisateur, vol.4:19）

このアルティザンは、『産業者の教理問答』の冒頭にかかげられた有名な産業者の定義に相当する（↳〔Catéchisme, vol.8:3-4=1975:303〕）。産業者の概念には、学者・芸術家が含まれる広義のものと、このような狭義のもの二通りがある。

注目すべきは、資本家・経営者と労働者の両者が同一平面で扱われていることである。彼らは産業者として一体をなしている。産業者の狭義の用法は、『産業体制論』から定着し、『産業者の教理問答』の後の『文学的、哲学的意見』、『新キリスト教』でもそうである。ただし、徐々に産業者内の問題にサン・シモンは気づいていくことになる。そのことを確認する前に、反国民党の内容がどのように限定されたかを見ておくことにしよう。

4. 体制移行論の完成と中間階級

反国民党は、〈経済と自由にもっとも適した体制の確立に対立する人々すべて〉であった。要するに、産業体制の確立をさまたげる人々なのである。その人々は、従って、産業体制の確立がどのようなものであるかによって決まってくる。

産業体制は、サン・シモンにとって、来たるべき社会像として構想される。サン・シモンは歴史的社会的趨勢的変動を〈文明の歩み〉とい

う言葉で示しており、歴史の流れに対して、社会の諸制度は、逆行してはならず、先行しすぎてもいけないとされている。

文明の歩みの方向は、産業の勝利である。サン・シモンは、現在を移行期であると考ええる。哲学的（精神的）次元では、神学体系から実証体系へ、政治的（世俗的）次元では、専制的な政体から、自由で産業的な政体への移行が『産業』において述べられている。しかし、この時期のサン・シモンの移行論には二つのものが欠けていた。産業者階級が歴史的に重要性をまわしてきていることはわかっていても、まだそれを、文明の流れの方向としてとらえきる歴史観は完成していない。また、産業者が中心となる社会がどのような社会なのかの、新体制へのヴィジョンがかたまっていなかった（↳〔Politique, vol. 3: 233〕）。この段階では、産業体制の確立は遠い将来のことと考えられているのである（↳〔Industrie, vol. 3: 31〕）。

『組織者』になると、二つのものがそろわないで、新体制の確立は間近なものと考えられるようになる⁽¹⁸⁾。〈逆立ちした社会〉への批判として、非生産的な人々が、産業者と区別されて攻撃される。

しかし、単に封建体制から産業体制へという区分では、なぜ封建体制をくずしたはずのフランス革命後も、産業体制が確立されないのかということを説明できない。『産業体制論』において、移行のみを専門にした段階、中間段階が考え出されるに及んで、それは可能になった。

中間段階の働きも、世俗的、精神的、二つの局面で考えられている。

軍事的原理から、産業的原理へ移るためには、中間的原理を作り出さねばならなかった。この原理は前者の優位を認めつつ、一方で、力の行為を産業者の利益から導かれた諸制限と諸規則に従わせなければ

ならなかった。（Système, vol. 5: 80）

このことは、司法上の問題の解法が、領主の専制的な裁量から、法とその専門家の手にゆだねられるようになってきた変化について述べている。その歴史の実体としては法律家（légist）が考えられている。

次に、精神的局面においてはどうかであろう。

同様に、啓示に基づいた神学的な権力を証明に基づいた科学的権力に移行させるためには、中間的権力を作り出さねばならなかった。この権力は、信仰で根本的に宗教的なものへは優越を認めつつも二次的な項目に対してはすべて審査権を認めさせた。

〔Système, vol. 5: 80〕

こういう人々は、形而上学者と呼ばれた。具体的には、宗教改革者、ユマニスト、啓蒙思想家などをさしているようである。

法律家、形而上学者たちの任務は封建体制をくずすことにあった。封建体制が崩壊していった結果として、フランス革命はおこったとされる。しかし、フランス革命の目的は、旧体制の破壊ではなく、別のところにあった。

この体制の破壊は、革命の成果でも、ましてや目的でもない。それは反対に、革命の真の原因であった。革命の真の目的、すなわち、文明の進行が革命に指定した目的は、新しい政治体制の形成であった。この目的が達せられていないからこそ革命はまだ全然終わっていないのである。（Système, vol. 5: 89）

革命において達成されるべきもの、それは新しい政治体制、すなわち、産業体制であった。

どうしてその課題が達成されなかったのか。その原因は、法律家、形而上学者に求められている。彼ら〈中間階級〉（classe intermédiaire）は、確かに封建制度をくずしていくのに力があつた。その功績は認めなければいけない。しかし、彼らが革命ののち、権力の座にすわりつづけているのはまちがいである。

今日、実際、新体制と旧体制との間に法学者と形而上学者が介在していることは、政治的思想の根絶できない混乱の主要な原因になっている。産業的政体の登場を我々に見えなくしているのは、その介在なのである。〔Système, vol. 5, 19〕

こうして、産業体制の確立をさまたげる人々は、〈中間階級〉として特定された。反国民党は、〈中間階級〉なのである。

〈中間階級〉への批判は、『産業者の教理問答』の中心的なテーマの一つを構成する。

この著作においては、これまでの著作と違って、貴族と産業者との対立の中に、民族的対立をからませている。つまり、産業者は原住民族のゴール人の子孫、貴族は征服民族のフランク人の子孫とされている。これは、当時のフランク人征服説と自分の説を結びつけようとしたものである。

ここでは、〈中間階級〉の起源は三つに分けて求められている。一つは、法律家である。成文法の導入によって司法の専門家が生まれ、彼らがフランク人の子孫の名において裁判をするようになった。もう一つは、平民の軍人で、彼らは大砲用の火薬が発見されることで新たに軍人となった、技師、砲手、銃手たちであった。そして、最後が土地所有者で、封建体制下で土地を買い取って新しく小規模の貴族階級となった者たちである。彼らは、貴族でも農業者でもなかったので、一般にはフランク人の子孫たちの主張や特権に反対する人民の保護者の役割をはたしていた。〔Catéchisme, vol. 8, 36 - 38 = 1975 : 320 - 321〕

産業者にとって、〈中間階級〉は旧体制下において有用な階級であった。しかし、それは革命までのことである。フランス革命によって第一階級となった〈中間階級〉は、封建制を再建してしまった。そのことにより、現在は異常で

あるととらえられる。

社会は、今日、次のような異常な現象を示しています。すなわち、国民は本質的に産業的であるのに、その政府は本質的に封建的である、ということがそれです。〔Catéchisme, vol. 8 : 33 = 1975 : 318〕

それで、サン・シモンは産業者を第一の階級にせよと主張するわけである。

産業体制の担い手である産業者と、その成立をはばんでいる〈中間階級〉、これが、サン・シモンの第三期の階級区分の基本である。

5. 〈最も貧しい階級〉の存在

第四期のサン・シモンは『新キリスト教』の中で、次のような立場から、カトリックとプロテスタントを批判する。

われわれは、このような宗教制度の構想を、ヨーロッパおよびアメリカに存在する宗教と比較しようと思う。そうすれば、この比較から、キリスト教と称しているあらゆる宗教が、異端にすぎないということ、すなわちそれらの宗教はキリスト教の唯一の目的であるところの、最も貧しい階級の福祉のできるだけ速やかな改善を、直接に目ざしているものではないと、容易に証明されよう。〔Nouveau, vol. 7 : 117 - 118 = 1948 : 117〕

最も貧しい階級の福祉のできるだけ速やかな改善を目ざしているかどうか、批判の基準となっている。サン・シモンは、貧しい階級の存在に目をむけるようになってきた。それはプロレテール (prolétaire) と呼ばれている。⁽¹⁹⁾

1821年頃に書かれたと推定されている草稿に、『プロレテール階級』というものがある。その草稿は次のようにはじまっている。

プロレテール階級を構成する人々は、実証的な観念が進歩したほどには、自分たちの境遇が改善されていないことを感じている。彼らは漠然とした方法

でしか自分たちの権利を感じていないことは事実である。もし、彼らに尋ねたとしても、自分たちの地位の不幸を減らすのがいかなる方法によって可能なのかを明白に説明することはできないであろう。しかし、議会が、彼らの肉体的、政治的存在を、いままでよりこの上もなく幸福にする可能性をもっているだろうことを、たいへん明確に意識している。
〔Proletaire, T6:455〕

プロレテール階級の不満は、社会進歩の恩恵に浴していないということである。これは、サン・シモン自身の不満でもあった。引用文の最後で「議会が……」と述べているのは、プロレテールの意識というよりは、サン・シモン自身の望みとみるべきであろう。産業の発展は、サン・シモンにとって、無条件に社会の全体の利益になるものとして考えられていた。しかし、プロレテールの存在は、そういった産業による予定調和に疑問をいだかせるものとなった。

サン・シモンとしては、産業者階級は一体であるべきだと思っている。しかし、産業者階級の中に首長と労働者の違いを認めざるをえなくなったことも事実である。

労働者階級の存在を重視するようになったので、『産業体制論』の第二巻には、耕作者、製造業者、商人、銀行家および他の産業者ならびに学者、芸術家にあてて次のような呼びかけがなされている。

みなさん、私の計画の直接の目的は、みずからの腕による労働以外になんらかの生存手段をも持たない階級の境遇を改善することです。私の目的は、フランスはもちろん、イギリス、ベルギー、ポルトガル、スペイン、イタリア、他のヨーロッパ、そして、全世界において、この階級の境遇を改善することです。この階級は（コミュニューヌの解放以来の）文明の限らない進歩にもかかわらず、もっとも文明化した国々でもなお最大多数をしめている。この階級は地

球上のあらゆる国々において、程度の多少はあれ、多数をなしているのです。〔Système, vol.6:81〕

ここで、〈腕による労働以外……〉という階級は、〈もっとも文明化した国々でもなお〉最大多数を占めていると考えられているのが、サン・シモンの特徴である。文明化が進めば進むほど最大多数を占めてくる階級とはとらえていない。産業の発展の恩恵を全員がこうむらないのは、おかしい、と考えているわけで、それは、先にプロレテールの不満という形でも表明されていた。

サン・シモンは確かに、産業者内に、2種類の人々があることを認めた。しかし、両者の利害が調停不能なものとして、対立する2つのカテゴリーを形成しているとは考えていない。プロレテールの境遇の改善は、彼らに仕事を与えること、仕事を遂行できるような能力を与えることで、直接的、間接的に社会参加の路をプロレテールに開くことを中心目的にするという形で構想されている。⁽²⁰⁾

プロレテールの存在は、サン・シモンにとっては、〈すべては産業のために〉という方向を否定するものとはならない。ただ、それだけでは、プロレテールの存在が改善されないようなので、そのための自覚的な努力が必要なものと考えられてきたわけである。

社会再組織の担い手は、その自覚をもった産業者でなければならなくなった。自覚をもたせるための書が『新キリスト教』であった。

6. 階級対立と社会的地位

サン・シモンの階級区分に関する考え方を時期を追って概観してきた。まず、サン・シモンに人間を階級的存在としてとらえる見方があることを、階級の対立による社会変動（革命）の

説明の存在に求めた。こういう階級対立の見方は、貴族対産業者という形で基本的には継承されてきている。けれども、それは産業者内部での、産業者の首長対プロレテールという形では表明されていない。プロレテールの存在は認識されていても、両者の対立が新たな社会変動の原因となるわけではないからである。それは、サン・シモンが、第三期以後、社会変動の原因として、産業を把握したことによる。産業の担い手とそうでないものとの対立（産業党対反国民党）が、階級対立として彼のとらえるものになっている。

そこで、産業者が社会の中心となる産業体制において、人々はどのような存在としてとらえられているのか、という見方をすると、人々は階級的存在としてではなく、社会的地位を達成するものとしてとらえられていることがわかる。哲学者は、我々の先行者において、社会的重要性の第一階級が出生と一致していたことを認めるでしょう。そして、未来に目を転じることによって、彼は、社会的重要性が、道徳、科学あるいは産業における最大の能力によって獲得されることを認めるでしょう。〔Catéchisme, vol.10:15=1975:421〕

産業社会では、〈社会的重要性〉、あるいは〈社会第一級の地位〉、〈社会的尊敬〉といわれている社会的評価を能力相応に受けることになる。そこには、地位と威信という二つのレベルが考えられている。地位としては産業者が行政機関に参加することが、〈社会第一級の地位〉を示しているようである。そのための具体的な機関をサン・シモンはいろいろ構想している。

真の平等、すなわち産業的平等は、各人がその社会的出資、すなわち実証的能力に正確に比例した。また、自分の手段—その中には資本をもちろん含めるべきである—を用いて行なう有用な仕事に正確に比

例した利益を社会から受けとることにある。〔Système, vol.6:17〕

この〈産業社会の自然的基礎〉〔système, vol.6:17〕とも言われている産業的平等を見ると、この社会には、機能主義的階層論が初期の形のままであてはまりそうな気がする。もちろん、サン・シモンには、階層構造がなぜ形成されるのかということ問いかける視点はない。能力のあるものを引き上げるために階層構造が形成されたというのではなく、サン・シモンは、能力のあるものが階層の上位についていないのがおかしいという形で考えている。

〈働く人〉だけから構成される社会には、階級対立はない。そこで実現される平等は、結果による平等ではなく、機会の平等である。属性主義ではなく、業績主義の主張がサン・シモンの眼目となる。

産業体制は、完全な平等の原則に基づいています。それは出生によるいっさいの権利およびあらゆる種類の特権を設定することに反対します。〔Catéchisme, vol.8:61=1975:334〕

産業体制は、業績主義の原理の社会なのである。一方、こうした業績主義の視点は、サン・シモンが、産業党、反国民党への人々の帰属を論じた際にも現われている。産業党、反国民党のいずれに属するかは次のような基準で決まる。

注目すべきたいへん重要なことがある。それは、市民が法のもとにおいて平等になって以来、市民がこれらの党のどちらか一方に属するのは、出生の偶然によってでは全くない。二つの党のうちの属する党を決定するのは単にその人の仕事と意見による。〔Politique, vol.3:196〕

貴族の生まれでも産業党に属するものがいれば、平民の生まれでも反国民党に属するものも出てくる。産業との関わりによってそれは決定される。このように、サン・シモンの視点は機

能的なのである（↳宮島〔1982：27-28〕）。

こういう視点からすれば、人は一生の間に地位を達成するという見方が出てきてもおかしくはない。その点から、サン・シモンが社会移動のチャンネルに注目していたことが興味深い。

サン・シモンは、15世紀以前の教会では、能力によって、位階が定められていたので平民でも教皇になれたといい、その機能を現在の教会が失なっていることを批判している〔Nouveau, vol.7：134=129〕。これは、サン・シモンが社会移動のチャンネルの必要性を認めていたためだと考えられる。産業体制において、その役目を何がはたすと考えていたかという、それは教育ではないかと思う。

民衆も金持も、二種類の欲求をもっている。彼らは物質的欲求と精神的欲求をもっている。すなわち、彼らには存在の欲求があり、同様に教育の欲求がある。〔Système, vol.6：82〕

教育は、万人にとって必要なものとして考えられている。彼は公教育制度の普及に熱心であった。⁽²¹⁾

教育が特定の階層に独占されず、能力に応じて社会的な地位が決定されるならば、教育が社会移動のチャンネルとなる。すると、サン・シモンの構想した産業体制は、社会移動の増大を許容する体制ということが可能だろう。

ただし、社会移動が達成されるとサン・シモンが考えていると読める記述は、主に産業体制においてのことである。つまり、そういう移動は、産業者のカテゴリー内で考えられている。したがって、社会の歴史的変動を階級対立によって説明するという視点と、来たるべき産業体制においては地位達成が行なわれるという視点は、サン・シモンの中で両立しうるのである。

7. サン・シモン階級論の現代的性格

サン・シモンの階級論には、①現在の階級状態を記述する、②社会再組織の担い手を求めるという二つの課題があると述べた。ただし、前者は、後者の視点の影響を受けているのはこれまで見てきた通りである。

一方、理論的な面から言うと、前節で示したように、基本的に二つの軸がある。つまり、①階級構造の歴史的変動図式と、②特定の歴史的段階での階級状態の記述である。

前者の説明において、サン・シモンが階級対立を重要な要素と見なしていることは明らかである。そして、その対立の原因は、産業との関わり方の如何に求められるようになってきた。後者の説明では、サン・シモンが来たるべき産業社会について語っているのが特徴的である。現状については、第二期に、階級の利害の対立が新たな革命の原因になるという形の見方をしていることもあった。けれども、来たるべき産業社会における産業者が、社会変動の要因となるような階級の対立を内部にもつとは考えていなかったようである。

こういった二つの軸があることは、サン・シモンが、階級をどういうカテゴリーとしてとらえていたかと問うた際に、二通りの答を可能にするであろう。しかし、どちらか一方では不完全なのである。

これまで、サン・シモンの階級論の評価に関係してきたのは、主に、その産業者の概念化に関わる問題である。大ざっぱな言い方をすれば、産業者の概念がプロレタリアの概念と未分化なことが、時代の状況によって、だめな点とされたり、よい点とされたりしてきている。第5節で見たように、サン・シモンは、プロレテールの存在に気づいていないわけではない。しかし、

その場合、主に念頭においているのは、農村の過剰労働力のようなものである。なるほど彼は、イギリスの工場労働者による労働争議などにも言及している。〔Catéchisme, vol.8:192=1975:403〕。しかし、彼自身の生きた時代の制約にはどうしようもないところがある。

この点については、富永〔1965:56〕が、サン・シモンがいかにか天才的な見通しの持主であったにしても、インダストリアルリズムの本格的な成立以前に、資本主義とか社会主義とかいう認識がありえたと考えること自体が無理であろう。〔中略〕もし、〈ブルジョワ的〉という言葉と、〈プロレタリア的〉という語に対比させた意味として使うものと了解すれば、サン・シモンをブルジョワ的か、プロレタリア的かと問うこと自体無理な設問といわねばならない。

と述べている通りであると思う。

私は、サン・シモンに産業者概念の評価に際しては、その枠組に何がおさまるかということではなく、その背後の認識構造と共に評価すべきだと考えている。産業者の概念が現代的にみえるのは、単に時代の制約がプラスに作用しただけなのではない。

〈文明の歩み〉に伴う人間活動の変化をサン・シモンは二つの点でとらえている。一つは、人間の自然に対する活動で、自然に対する働きかけが増大し、集会的になされるようになってきたということである。もう一つは、人間の人間に対する活動で、それは、支配から管理へとという流れとしてとらえられている。

軍事的行為、すなわち封建的行為は、初めは最も強力でした。しかし、それはたえず衰弱していったのに対して、管理的行為はたえず重要性を獲得していき、そしてついには、管理的勢力が軍事的勢力に必ず打ち勝つはずです。軍人や法律家たちは、ついには管理に最も有能な人々の命令に従うはずです。な

ぜなら、開明社会は管理されることだけを必要とするからです。〔Catéchisme, vol.8:44=1975:324〕

封建的行為、軍事的行為とは力による支配を示している。それが、管理的行為に移りつつあるというのがサン・シモンの認識である。この方向を肯定的にとらえているところに、サン・シモンの特色がある。というのも、支配とは別個のカテゴリーとして、管理は考えられているからである。したがって、産業者たちが権力についても、彼らは支配をするのではない。サン・シモンは新旧両体制の違いを次のようにまとめている。

古い体制 (système) においては、社会は本質的に人間によって支配されていた。新しい体制では、社会はもはや諸原理によってしか支配されない。〔Organisateur, vol.4:197〕

サン・シモンは、産業化の流れを、支配から管理へと人間活動の変化としてとらえた。このことの意味を階級論の文脈に即して評価する必要がある。それは、サン・シモンの階級論においては、産業体制を分析するのに、支配階級、被支配階級という概念に拘束されないことを意味する。そういう観点からすれば、彼の議論が現代的にひびく理由は、中間層問題に求められると言えよう。

もちろん、サン・シモンはホワイト・カラーの登場などは知らない。しかし、サン・シモン流の産業との関わりという観点からの区分に従えば、彼らは産業者に区分されるものである。とはいえ、ただ区分されるという点からの評価では不十分である。

新中間層の登場に際して、多くの論者は、それが支配する階級なのか、される階級なのかという設問の仕方から抜けられなかった (富永〔1980:150〕)。ところが、サン・シモンの

階級論からいえば、新中間層をプロレタリアートの後衛 (Mills, (1951=1957)) としたり、一部は支配階級である (Dahrendorf (1959=1964)) とする議論はもともと不要なものとなる。

この点に関しては、労働者問題が表面化していなかったという時代の制約に帰するよりも、人間活動の変化を見通す視点が、サン・シモンにあったとする方がよいのではないかと考える。

かつては悪い意味でサン・シモンに冠せられた「空想的」という形容詞を、構想力の豊かなという意味で受けとる必要が出てきているのである。

注

- (1) サン・シモン研究においては、「サン・シモンを、他の理論との関連においてでなく、それ自体において理解することの必要性がいまや強調されなければならない。」(宮島〔1982:21〕)とされている。
- (2) 広田〔1974:112-114〕は、サン・シモン研究史が一つのイデオロギー史でもある点を指摘している。
- (3) マニユエルは、「サン・シモンの諸著述から王政復古期の政治的パンフレットとしてのそれらの論争的性格と、時として彼がおちいったえせ科学的たわごとを、価値なきものと取り棄てるとしても、職業的階級構成にもとづく人間と社会の理論は残る。」(Manuel〔1956=1975:457〕)と述べている。
- (4) 階級闘争史観をみとめるか、「労働者階級」をどうとらえていたとするのか、などという点がこの問題に関わる。(→松田〔1979〕)
- (5) 自然主義型、議会主義型、産業主義型、道徳主義型と、4つに社会再組織論が展開していったと考えている。
- (6) サン・シモンの著作全般に関しては、森博教授の日本語版サン・シモン著作集を参照。(本誌が刊行される頃には、出版されている予定。)
- (7) 田中〔1983〕では、未完の『新キリスト教』の内容を確定してゆく際に、第三期の後半の著作を援用するという形をとった。本稿でも、第三期と第四期の境目を、年代的に区切るのとは不可能であった。
- (8) サン・シモンの著作の出典表記は、原則として
〔Lettre, vol.1: 26 = 1948 : 66 〕
↓ ↓ ↓ ↓ ↓ ↓
タイトル 全集 巻数 ページ 邦訳 邦訳 邦訳 邦訳 邦訳 邦訳
出版年 出版年
というレアウトで行なう。
- (9) <最初の民衆運動はフランスでは科学者や芸術家たちによってひそかにうながされたのでした。>
〔Lettre, vol.1: 29=1948:68〕
- (10) 自然科学の発達によって、自然現象に関する知識をもつことは、すぐに、その現象を制御できることにつながった。社会現象にも、それと同じことが期待できるはずであるという考えが、サン・シモンの初期の学問論の根底にある。
- (11) とりあえずは、田中〔1983:126-141〕を参照。この点に関しては別稿で論ずる予定。
- (12) <現在フランスには3種類の土地所有がある。すなわち、旧領主財産、平民のものと呼ばれているもの、そして、国有地である。>〔Projet, le Censeur IV;23-24〕と述べられている。第一のものは、フランス革命後にも残っていた貴族の大土地所有、第二のものは、ブルジョワや農民が革命以前に手にしていたものを示し、<国有地>とは、革命後に国有財産として売却された、僧侶、及び、亡命貴族の土地を示していると考えられる。従って、<国有地の所有者>とは、おかしな言い方であるが、これらの土地を購入した人々のことである。フランス革命による土地所有の変化については、小林〔1972:520-548〕を参照。
- (13) <内政においては、我々は単にイギリスの模倣

者にすぎない。そして、イギリスにおいては、内閣は反対党から形成され、ほとんどつねに、その全体を一新する。新しい選挙のごとに王は、同じ党で、同じ政治的原則をもった人々、ピット氏とその友人たち、フォックス氏とその友人たちのように、みんなからそのすぐれた才能を認められている人々を内閣に認める。要するに反対党がなければ、大臣たちはあっても、決して内閣は存在しないのである。>〔L. E. O., Le Censeur III : 314〕

(14) 〔Projet, le Censeur VI: 10-31〕〔Prospectus, le Censeur VI: 1-4〕

(15) 『ジュネーヴ人の手紙』の中で、夢の中の啓示として書かれている社会では、すべての人間が働くこととされている〔Lettre, vol.1 : 55=1948: 90〕。

(16) 〔Industrie, vol.2: 183-185〕には、セイからの引用が見られる。

(17) セイ及び古典派に関しては、岡田〔1982〕中久保〔1975〕を参照。セイの企業家の概念の影響もサン・シモンにはあるように思われる。

(18) 『産業』から『組織者』に至るサン・シモンの思想の展開については、広田〔1969〕〔1972〕に教えられることが大であった。

(19) プロレタリアと訳すことは、すべてが近代的賃労働者かの印象を与えるといけないのでされた。

(20) サン・シモンが救済すべき対象として主に念頭においているのは農村の過剰人口(terrassiers)のことである(↳〔Ouvrier, T.6: 439〕)

(21) サン・シモンは、1815年6月に「初等教育パリ協会」の設立人に名を連ねたこともある(Manuel, 1956=1975: 363)

文 献

サン・シモンのテキストからの引用は、Oeuvres de Saint-Simon (Edition Anthropos) によった。全集版未収録の le Censeur 誌の論文(L. E. O., Projet, Prospectus) は森博教授の御好意により参照することができた。

邦訳

藤原 孝訳, 1981 「ヨーロッパ社会の再統合—1, 2—」『政経研究』(日本大学法学会) 17-2: 299-323; 17-3: 481-510。

西出不二雄訳, 1970 『空想主義的社会主义教育論』(世界教育選集 52), 明治図書: 121-201

坂本 慶一訳, 1975 『オウエン サン・シモン フーリエ』(世界の名著 続8), 中央公論社: 303-436

Dahrendorf, R. 1959 Class and Class Conflict in Industrial Society, Sanford, Univ. =1964
富永健一訳『産業社会における階級および階級闘争』ダイヤモンド社。

広田 明 1969 「後期サン・シモンにおける新体制の構想」『経済科学』16-2: 85-123。

——— 1972 「サン・シモンの未来社会論(上)」『経済科学』19-3: 23-60。

——— 1974 「サン・シモンの社会組織思想における市民社会と国家—1, 2—」『社会労働研究』20-1: 93-119; 20-2: 29-90。

Ionescu, G. 1976 The Political Thought of Saint-Simon, Oxford Univ. Press.

小林良影 1972 『フランス革命の経済構造』千倉書房。

Lenski, G. E. 1966 Power and Privilege, Mcgraw-Hill.

- Manuel, F. E. 1956 The new world of Henri Saint-Simon, Harvard, U. P. = 1975 森博訳『サン・シモンの新世界』上, 下, 恒星社厚生閣。
- 松田 昇 1979 「サン・シモンと産業社会論」戸谷修・佐野勝隆 (ed.) (1979: 69-85)。
- Mills, C. W. 1951 White Collar, oxford, U. P. = 1957 杉政孝訳『ホワイト・カラー』東京創元社。
- 宮島 喬 1982 「サン・シモン産業社会論における社会学的視座」『社会学史研究』4: 18-37。
- 水田 洋・水田珠枝 1971 『社会主義思想史』(教養文庫 709)社会思想社。
- 中久保邦夫 1975 「J. B. Sayの「生産」と「企業家」」『六甲台論集』26-2: 1-14。
- Nisbet, R. A. 1966 The Sociological Tradition, Basic Books = 1975/1977中久郎訳『社会学的発想の系譜』I, II, アカデミア出版会。
- 岡田純一 1982 『フランス経済学史研究』御茶の水書房。
- 高橋 徹ほか 1965 『社会心理学の形成』(今日の社会心理学 1), 培風館。
- 田中秀隆 1983 「サン・シモンの社会再組織論」東京大学大学院社会学研究科修士論文(文学部社会学研究室在)。
- 富永健一 1965 「産業主義と人間社会」高橋ほか〔1965: 3-200〕
- 1980 「現代社会と階層構造 上, 下」『エコノミスト』58-2: 148-155; 58-3: 80-89。
- 戸谷 修・佐野勝隆 1979 『現代社会論』税務経理協会。

(たなか ひでたか)